



## 盲導犬が教えてくれたこと ～「見守る」という優しさ～

先日、2月13日(金)の3時間目、4時間目に、全校で盲導犬を迎えた出前授業を体育館で行いました。

静かに指示を待つ盲導犬の姿に、子供たちは驚きと尊敬の眼差しを向けていました。

学習の中で最も印象的だったのは、「盲導犬は工作中、決して触ってはいけない」というお話です。ハーネス(胴輪)をつけている時の盲導犬は、ユーザー(視覚障害のある方)の安全を守るために全神経を集中させています。

ご家庭でもぜひ、お子さんに「どんな様子だった?」と聞いてみてください。子どもたちが感じた「すごいな」「大切にしたいな」という気持ちが、誰もが暮らしやすい社会を作る第一歩になります。

盲導犬との学習を通じて、視覚に障害がある方にとっての「社会の壁」について考えました。盲導犬は助けてくれる「生き物」ではなく、共に歩む「パートナー」です。街で見かけた際、保護者の皆様にも以下のことを意識していただければ幸いです。

### ①声をかけずに見守る

じっと見つめたり、名前を呼んだり、食べ物をあげたりするのは禁物です。盲導犬の集中力が切れると、ユーザーが危険にさらされます。

### ②「お手伝いしましょうか?」のひとつこと

盲導犬がいても、道に迷うことはあります。信号待ちや段差で困っている様子があれば、犬ではなく「人」に声をかけてください。

### ③温かく見守る

基本は「そっと見守る」こと。それが盲導犬にとって一番の応援になります。

「知っている」ことが、優しさに変わります。子どもたちと一緒に、バリアフリーな街づくりを考えていきましょう。



## 見えない「困り感」に寄り添う ～みんな違って、みんないい～



教室には、いろいろな個性が集まっています。中には、大勢いる中でも緊張せずに発言できたり、大きな音が苦手だったり、急な予定変更でパニックになってしまったりする子がいます。これは、わがままではなく、「脳の情報の受け取り方」に特性があるからです。

例えば、補聴器が音を大きくするように、特定の発言や物音が何倍にも大きく聞こえてしまう子がいます。また、先の見通しが立たないと、霧の中を歩いているような強い不安を感じる子もいます。

私たちが「ちょっとした工夫(視覚的な指示や、静かな場所の確保)」をすることで、その子の「困り感」は「安心」に変わります。

子どもたちが互いの個性を認め合い、「苦手なことは助け合えばいいんだ」と思える温かい学級・学年・学校を、教職員と家庭で共に育てていきましょう。

